

もくじ 震撼！爆弾空襲 1P 手記 爆弾が落ちた日 ③ 2P
 鹿浜での子どもの生活 ① 3P 地元の古代 ③ 4P 博物館資料 4P

足立史談

第569号

2015年7月15日

足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 (27-308)



昭和56(1981)年5月2日 足立区佐野のセンター建設時に発見された不発弾

小特集 いま改めて70年前を振り返る

震撼！爆弾空襲

郷土博物館

あだちの爆弾空襲
 戦後七〇年の今年、さまざまな行事や証言記録の収集が行われていまます。戦争体験者の方々は少なくなり、往時の足立を物語ることも難しくなってきました。

東京の空襲といえは、昭和二十(一九四五)年三月一〇日の東京大

空襲に象徴されるように、焼夷弾が雨あられと降り注いだことが知られていますが、爆弾空襲のことも人々の記憶に残っています。現在、ご投稿いただいた井上きみ子著「手記 爆弾が落ちた日」に関連して爆弾空襲について紹介します。

■爆弾と焼夷弾 焼夷弾は火災を起こさせるために投下された兵器でした。大量に用いら

れました。いっぽう爆弾は破壊を目的とした兵器で爆発の威力で堅牢な目標に用いられました。戦時中の暮らしについての聞き取り調査が掲載されている『葦笛のうた』(足立女性史研究会編・ドメス出版)によると、当時の人々は明確に爆弾空襲と焼夷弾空襲を区別していました。被

害や影響も両者では大きく異なっていたからです。

■梅島駅前の爆弾 梅島小学校の創立百周年記念誌『梅島』(昭和六十三・一九八八年刊)には爆弾空襲のことが座談会で記載されています。一部を抜粋・再編集して紹介します。

・三月四日の空襲は不気味なものでした。雪がちらついてどんよりとした雲の中から爆音が聞こえ、どの方向か分からず不安でした。

(山下宏一氏証言)
 ・この日梅田町のあちこちに爆弾が落とされましたが、その中の一発が学校近くの城北湯の前に落ちましたね。そこには防空壕が掘ってあったのですが、I君が亡くなりました。

(小堀富一氏証言)
 ・その防空壕にはI君の外に幼い弟妹三人とお母さん、近所の中学生N君とS君の合計七人が退避していました。七人とも一瞬にして吹き飛ばされてしまったとのことです。

(鴨下清純氏証言)
 亡くなった児童は学童集団疎開から帰ってきて亡くなった子も含まれていたと記録されているほか、梅田町で家が直撃をうけ家族を亡くされた方のお話や、梅島第二国民学校が爆弾でやられ「ばくだん池」が出来た話などが収録されています。このように普段の暮らしの中に訪れた悲劇には震撼せざるを得ません。

■記録された爆弾空襲

戦災の記録を見ると爆弾空襲と焼夷弾空襲は区別されて記録されました。しかし記録は不完全で、とくに大規模な被害が出た三月一日以降は、断片的に記録されただけでした。爆弾空襲が記録上で確認できるのは次の十一回で工場だけでなく市街地も爆弾空襲にあつていたことが判ります。

《昭和十九（一九四四）年》

- ① 二月二七日【南鹿浜町】東洋織維会社倉庫

《昭和二十（一九四五）年》

- ② 一月二七日【千住橋戸町】日本製靴工場・送電線・斎藤製パン工場、【千住仲町】市街

- ③ 二月一九日【南宮城町】理研工場・上中工場三星セメント、【沼田川端町】東京芝浦電気足立製鋼所

- ④ 二月二五日【栗原町】日清紡績会社
- ⑤ 二月二六日【千住三丁目・千住柳町・千住大川町・千住元町・千住寿町】いずれも家屋

- ⑥ 三月四日【北堀之内町】大和毛織株式会社、【梅田町】市街地
- ⑦ 三月一〇日【ほほ足立区全域】市街地・工場

- ⑧ 四月十三日【足立区南部】市街地・工場
- ⑨ 五月十二日【六月町・竹塚町・栗原町】市街地

- ⑩ 五月二五日～二六日【足立区南部】市街地
- ⑪ 八月八日【千住曙町・柳原町】市街地ほか

■不発弾の発見

爆弾は軟弱地盤の足立区や周辺では不発弾となることもしばしばで、戦後何十年も経て発見される例があります。前頁の写真もその一つで、昭和五六（一九八一）年に足立区佐野での事例です。「手記 爆弾が落ちた日」は平成九（一九九七）年一〇月五日に処理された千住緑町での不発弾のことが題材になっています。

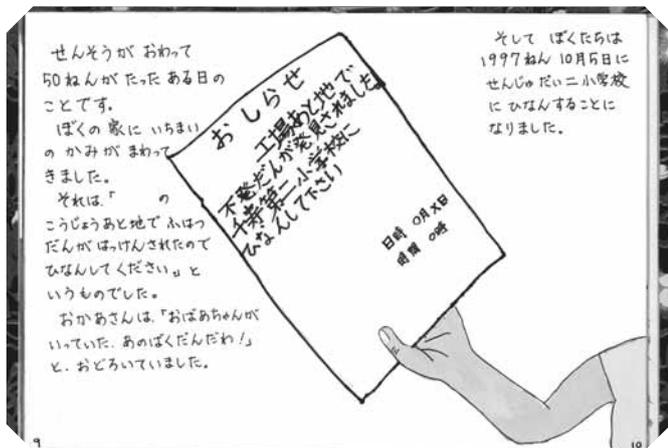
（郷土博物館）

手記 爆弾が落ちた日

③

井上 きみ子 著

（承前） そんな思い出に浸りながら帰宅し、テレビを見てびっくりしました。不発弾はN会社の建設用地で発見されたとのこと。先ほど町で見かけたあの車は、その処理に向かうためだったのです。数日後、その不発弾を掘出すために周辺の人々は学校等に避難することとなり、その映像がテレビのニュースに出ました。その時、画面いっぱい映し出された四人連れの家族を見て、心に期するものがありました。和気藹々としたその様子からは緊張感も無く、



湯本清孝・雅孝「ふはつだんが落ちた日」より

マスコットのぬいぐるみを抱いて、まるでピクニックにでも行く様な、たのしそうな姿は、正に平和に、きらきらと輝いているかに見えるました。この人たちに二度と悲惨な戦争の苦しさを味わせてはならない。この人たちの笑顔を、うばってはならないという強い思いが私の心の中をかけめぐりました。掘出されて吊り上げられた爆弾の大きさに驚き、複雑な思いにかられながらも、私の中の戦争に対する、いくつかのこだわりの一つに整理がついた様な気がしました。しかし一生かかっても整理のつかない深い思いは癒える事が無いでしょう。

縁故疎開ですごした北鹿浜町の思い出

鹿浜での子どもの生活 11

小川 誠一郎

※本連載は故井上きみ子氏の子、湯本さゆり氏よりのご提供です。貴重な資料を公開していただいたことに紙上より御礼申し上げます。（編）

■鹿浜の風景 皿沼・鹿浜は、江戸初期より荒川沿いの湿地が開墾された農耕地で、後に整備される見沼代用水に支えられ、高い生産性が維持されてきた。里山や雑木林に恵まれた環境とは一味違う、農民によつて整備された豊かな自然を享受することができた。関東大震災が起こるまで、実家の掘り抜き井戸は湧水であふれ、流水で金魚を飼っていた。その洗い場池が井戸端に名残をとどめていた。田畑の境界や畦の要所に、真っ直ぐ伸びる榛木（ほんのき）が植えられ、刈り取った稲の積み上げの支柱や稲棚の足場・支えに使われた。畦道脇には大小様々な溜めが整い、下肥や用水が蓄えられていた。家屋敷を抱くように竹林が茂りケヤキやシラカシが高々とそびえ立って、屋敷と樹林が作りだす美しい温和な景

観を平坦な地に醸し出した。小粒の實をつける柿の木が庭に植えられていた。食用というより柿渋を採集するためだったろうか。真竹は農作業用に切りだされ、ケヤキは屋敷の普請の際、梁の良材となるので、大きくなると伐採し土中に埋めて、世代を越え蓄えられた。(※)

■自然と虫 クリやクヌギの雑木林が近くにないため子供の喜ぶ大型昆虫は少なく、農作物に付くカナブンばかりうるさく飛び回っていた。カブトムシが来る木は限られ知れ渡っていた。溜め池や沼地に恵まれず、トンボの種類も数多くはなかった。ある時、洗い場池の垣根脇の崩れかかった岸辺で釣りをしていると、猫柳の根方に不意に小クワガタが現れた。均整の取れた美形に見られるばかり、体が固まってしまった。実家の生垣には、黒っぽいノラガイコ(野蚕)がいたので、葉っぱと一緒に取って来て、飼育したことがあった。忘れた頃に形の整わぬ繭ができていた。真っ白の本当のカイコを、友達から分けてもらったことがある。こちらは桑の葉でないと食べなかった。

オナガの姿に似合わぬ啼き声には驚かされた。

稲刈りを終えた見渡す限りの水田の遠くにシラサギが降り立ち、単独行動で蛙やドジョウを探している。視界に入るのは二、三羽、数はいつも同じくらいで、人との安全距離は三〇mほど、飛び立って行く優美な姿は別世界から来た使いのようだった。

軒下の梁の継ぎ目や樽木との隙間にスズメの巣があり、竹の棒を差し入れ、乱暴に探ると卵がこぼれ落ちた。「セイちゃん、うめえよ！」割って一気にすすり込むのがある。時には鶏舎からそつと卵を抜き取って来て、器用に穴を開け同じようにするのだが、ついて行けなかった。

足長蜂の小さな巣を落とし、中から白い蜂の子を取り出して食べる子もいた。一方でスズメを捕まえようと仕掛けを工夫する。サンダルボツチ(栈俵)の上に、棕櫚の細ひげを輪にしたものをいくつも結びつけ、穀粒をまいておくと、やって来たスズメの足に輪がからんで捕まるよ！と簡単なのを教えられたが、材料が揃わずだめだった。

■田畑と野外からのあやつ 野良の野菜は、群れて遊ぶ時、皆の気が向くと、早速もぎ取って来て衣服で拭いて食べた。カブは皮をむくと甘くておいしかった。キュウリは味もか

たちも様々、薄甘いナスはふわりとして食べにくかった。サツマイモは一口か二口程度、大きいので持てあまし気味、太白が良かった。トマトは苦手だったが、熟れ具合の違うのを試すうちに、良さが分かってきた。麦の穂を摘んでは、中身を噛んで、ガムにする子がいた。ほおずきの果実を口にふくみ、舌でならし甘い種子汁を慎重にしほり出し、音の鳴るほおずきに仕上げる、これも競争だ。野生のキイチゴは気に入ったが、アケビ、クワ、グミの類はなぜか食べずらいというか、機会に恵まれなかった。鹿浜の「グミの原」と呼ばれる辺りは、沢山のグミの木が用水掘り沿いに自生？ していた。

■水分と熱中症 夏場の健康維持に水分補給がいかに大切か、今や常識となったが、当時は各家の井戸水だけが飲料水、街中の水道は臭くて(塩素臭)飲めやしない！ と鹿浜の人は口癖のように言う。子供達は外で遊ぶ際、喉が渴いても飲み水がない！ どうしていたのだろうか。生水はお腹をこわす、飲むならヤカンの湯冷まし！ ではいちいち家まで戻らないと飲めないじゃないか。熱中症に四、五回罹った。丸坊主のうえ

水分不足では無理もない。対応策は日陰の涼しいところで休むことだけ、水分の大量補給が大事！ これはまだ知られていなかった。砂糖水

などあるはずもない。運動中は水を飲むな！ 兵隊の行軍を想定した我慢が幅を利かした時代だった。涼しい部屋で横になっていると、祖母がキュウリを薄く刻んでもみ加減にしたものを両足の土ふまずにのせて、油紙でくるんでくれる。優しい冷感に気持ちちが和らいだ。

※乾燥した土中というより、洗い場の池の底のような半ば水中が良いようです。実家の普請に使われた話しを母から聞いたように思う。

(慶応義塾大学名誉教授)

区役所アトリウムで

学童疎開展開催へ

学童疎開を伝える会

空襲―学童疎開―縁故疎開―不発弾……。戦後七〇年の今年、郷土博物館登録グループの一つ学童疎開を伝える会(会長 木嶋孝行さん)の皆さんが証言や資料を現在積極的に収集し、足立区役所(足立区中央本町1-17-1)の1階アトリウムで展覧会を開催します。ぜひご観覧にご来場下さい。

【開催日】7月28日(火)〜

8月7日(金)

【観覧料】無料

【お問合せ】郷土博物館

電話〇三三三六二〇一九三三

おでかけ下から 地元の古代

③

足立区役所文化財係

伊興遺跡公園展示館には、入ってすぐ左側に子持勾玉のレプリカが展示されています。伊興遺跡を代表する出土品の一つです。

子持勾玉は、親の勾玉からいくつもの小さな子の勾玉が生まれ出る様子を表しています。勾玉は縄文時代から装身具として広く作られますが、子持勾玉は古墳時代中頃(約五世紀)から作られるようになりました。玉に宿る灵力に期待して、子孫の繁栄と農作物の豊かな実りを祈る呪術に使われていたのではないかと考えられています。



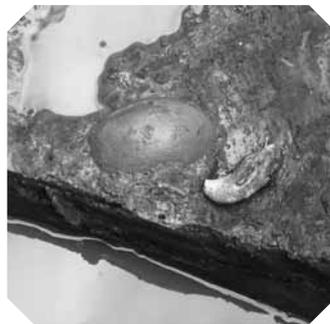
⇒伊興遺跡出土子持勾玉レプリカ

これまで子持勾玉は、西日本を中心として全国で約五〇〇個が出土しています。そのうちの五個が足立区内から見つかっています。内訳は伊興遺跡で四例、法華寺境内遺跡で一例が偶然に発見されたり、調査で検出されています。特に法華寺境内遺跡では、小さな穴に子持勾玉を埋め、

伊興遺跡公園展示館

玉から玉が生まれる不思議・子持勾玉

その上からかめや壺で囲んだ状態で発掘されました。古代人が子持勾玉に願いを込めた思いが浮かんできます。



⇒法華寺境内遺跡出土状況

伊興遺跡周辺では古代から毛長川を利用した水上交通が盛んに行われていました。交易によって西日本の文化もたらされ、畿内と同様な古代の祭祀が行われるようになってきたと考えられます。

子持勾玉を用いた祭祀は古墳時代の終わり(七世紀)まで続いていたとみられます。不思議な玉は見る者を魅了し、古代人の心の風景を垣間見せてくれます。

(遺跡発掘調査員 鎌田望里)

【お問合せ】

文化財係

電話 〇三三三八八〇五九八四

二〇二〇年足立の博物館資料

三菱一号館美術館

河鍋暁斎の肉筆画公開中

河鍋暁斎(かわなべ・きょうさい)は強烈な印象を与える画風で知られる日本画家です。はじめ浮世絵師の歌川国芳に学び、次いで狩野派の門弟となり、その後、独自の画風を確立しました。

足立とのかかわりは、安政六(一八五九)年に最初の妻、清が没した後、鹿浜村の農民・榊原氏の登勢と結婚したと登録されています。登勢は、万延元(一八六〇)年に次男の周三郎(後の河鍋暁雲)を生み、その年に亡くなります。その後、暁斎は活躍をつづけ今日では名声を築いています。

この暁斎の作品が足立区に伝来しています。

郷土博物館が保管する一点、《大津絵風雨帖》が現在、三菱一号館美術館で開催中の展覧会「画鬼・暁斎―幕末明治のスター絵師と弟子コンドル―(9月6日まで)」に出展されています。同資料は折本形式で紙箱表題「惺々暁斎風雨帖」、外箱表題「河鍋暁斎筆大津絵風雨帖」とあるもので、暁斎肉筆の9図が収録されています。

詳細は郷土博物館専門員の小林優



氏の論考(『暁斎』第115号)をご参照下さい。
三菱一号館美術館は東京都千代田区丸の内2-6-2(電話〇三三-五七七七八六〇〇)。月曜休館。開館時間 11時~18時 【入館料】一般 1500円/高校・大学生 1000円/小中学生500円です 【交通】東京駅丸の内南口から徒歩5分